

# 2019 年度 チャイルドライン OSAKA 年次報告書



I	チャイルドライン OSAKA 概要	1 ページ
II	電話のデータ	2 ページ
III	2019 年度をふりかえって	
	コロナ禍におかれた子どもの様子	5 ページ
	小学生の電話環境について	6 ページ

## I チャイルドライン OSAKA 概要

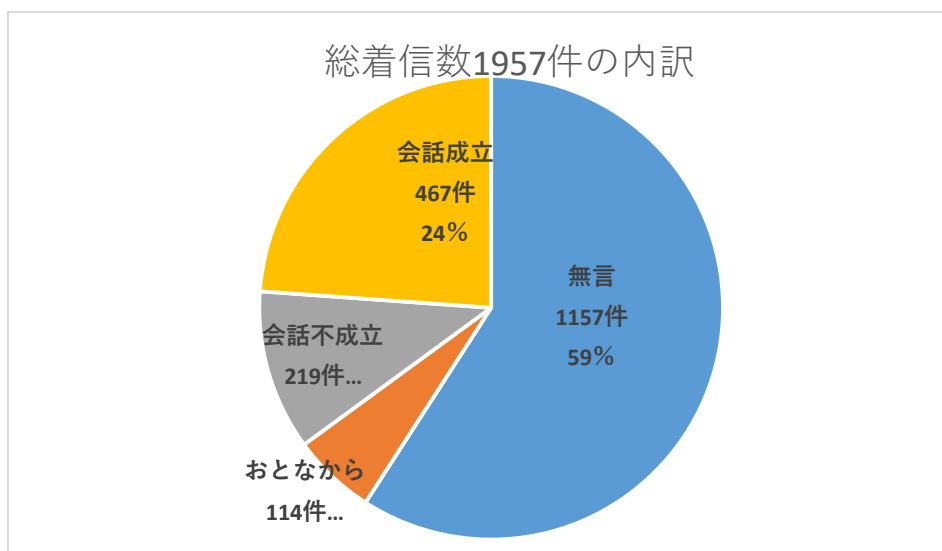
1. 事業の開始 2001年1月より常設
2. 事業目的 子どもたちが気持ちを聴いてくれる人に出会い、安心して話せる電話としてチャイルドラインを開設し「子どもの意見表明」の場を確保します。  
カード・ポスター・インターネットなどを通じ、チャイルドラインの広報をすることで、子ども・子どもにかかわるおとな・社会へ、子どもが意見表明することの大切さを伝えます。
3. 実施内容 18歳までの子どもの専用電話「チャイルドライン」の開設  
全国統一フリーダイヤル(0120-99-7777)で子どもたちの声を聴く  
毎週金曜日 16時～21時チャイルドライン開設  
  
日曜スポットチャイルドライン開設 10回  
夏の全国一斉時間延長キャンペーン参加 (8/23、8/25、8/30、9/1)  
定例会 月1回  
支え手研修 (11/2)  
5月～8月ボランティア養成講座・実践講座開催 3名が新スタッフとして活動開始  
AIAIフェスタ(地域のイベント)へ参加 (11/9)  
泉州キワニスクラブ例会に参加、チャイルドラインを紹介 (2/7)  
チャイルドライン支援センター臨時総会参加  
チャイルドライン全国運営者会議参加  
大阪連絡会、近畿北陸エリア会議、エリア研修等参加  
2018年度年次報告作成
4. 広報活動 <カード配布> 大阪市立中学1年生へカード配布(約17500枚)  
港区の大阪市立中学2年・3年生へカード配布(約1100枚)  
港区の大阪市立小学校全学年へカード配布(約3900枚)  
<ポスター配布> 大阪市立中学校へ配布(132枚)  
港区の大阪市立小学校へ配布(11枚)  
大阪府下の府立高校、市立高校、私立小・中・高校へポスター配布(大阪連絡会としての取り組み)

## 2019年度に配布したチャイルドラインカード

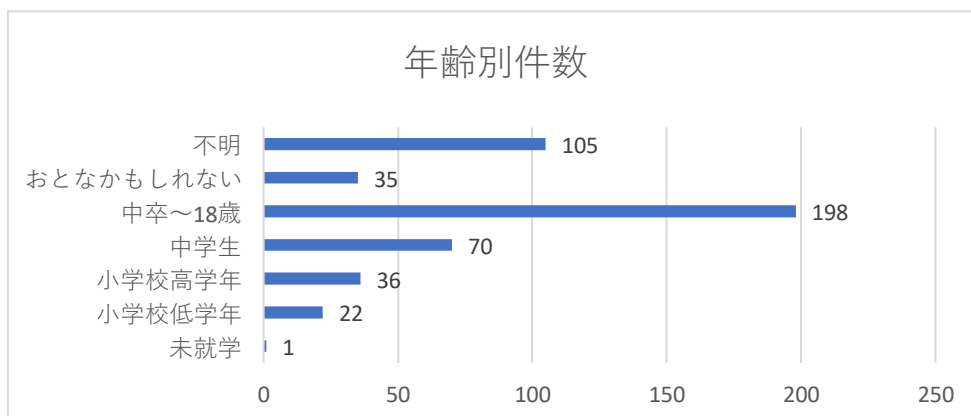


## Ⅱ 電話のデータ

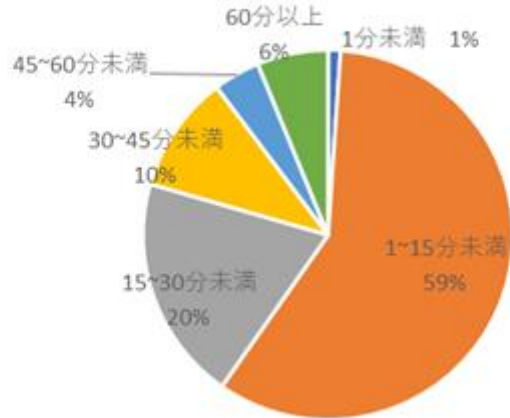
2019年度は59日チャイルドラインを開設し、1957件の電話を受けました。



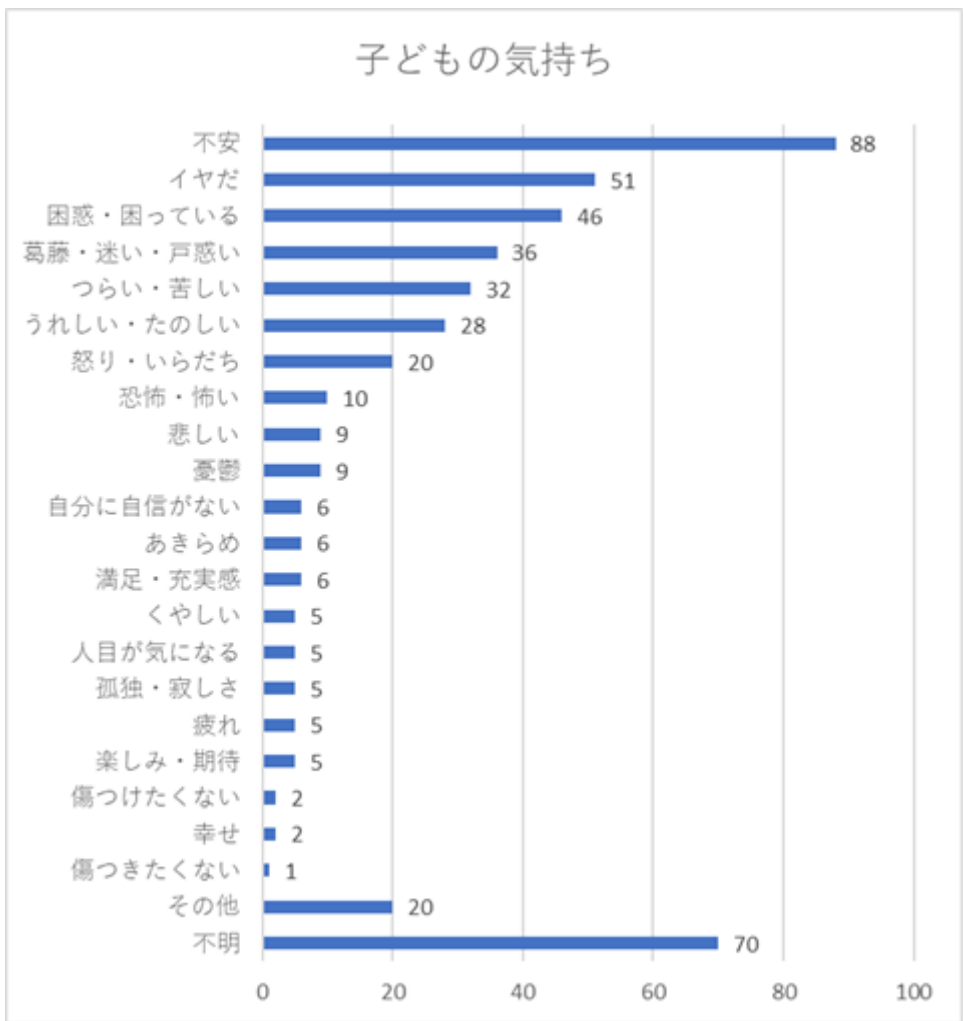
会話成立した467件の内訳

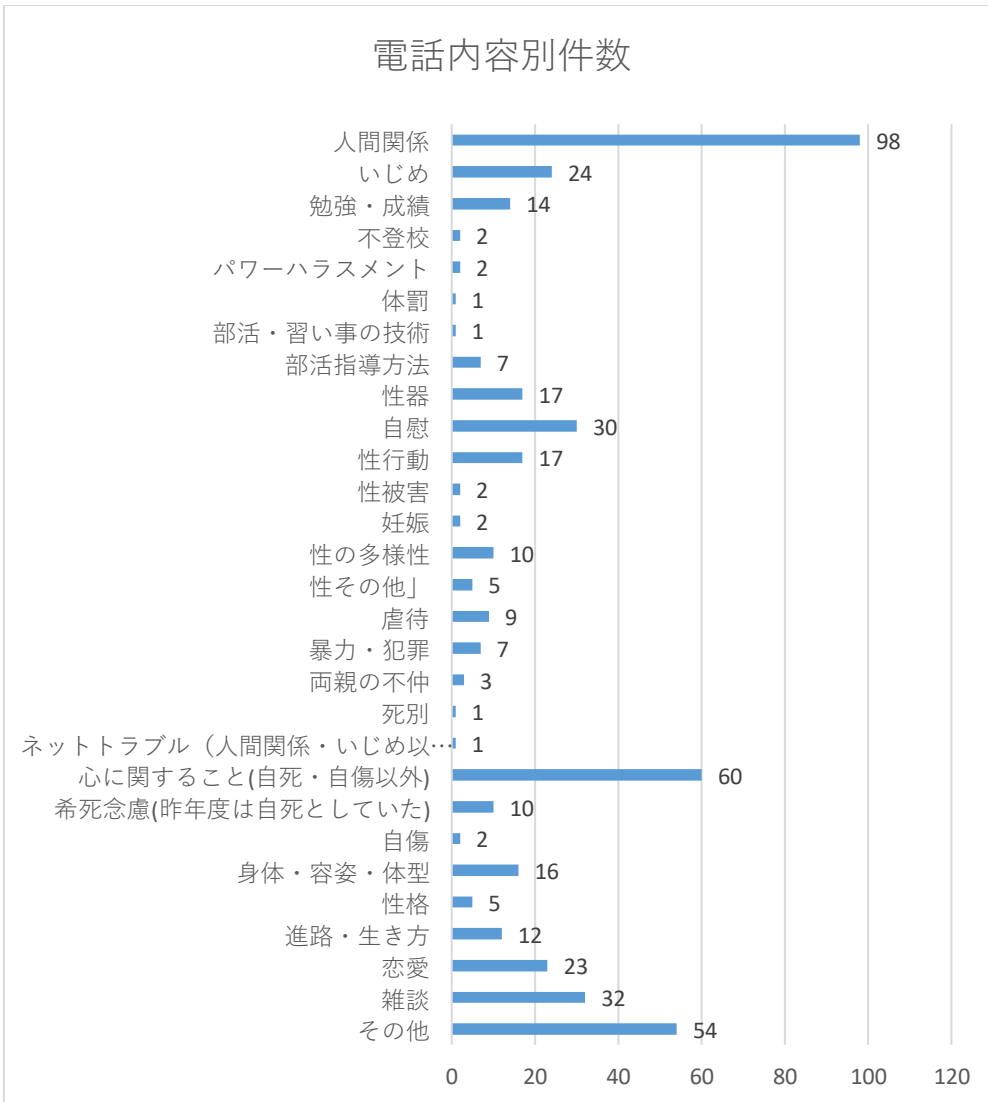
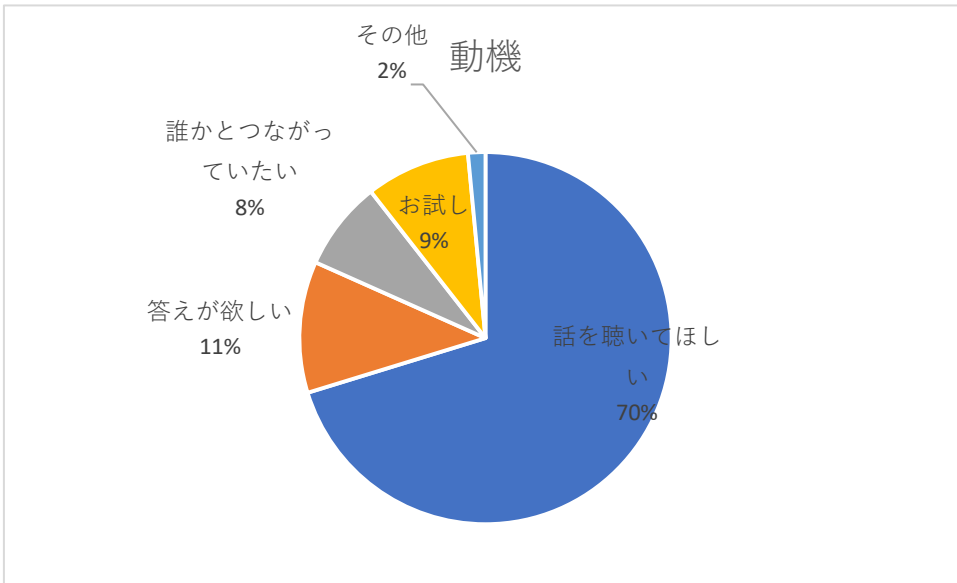


### 通話時間



### 子どもの気持ち





### Ⅲ 2019 年度をふりかえって

#### コロナ禍におかれた子どもの様子

2020 年になり、国内でも新型コロナウイルス感染がひろまりました。2 月末突然学校が休校になり、そのまま年度がかわりました。子どもたちへの影響も大きく、全国のチャイルドラインにも新型コロナウイルス感染症流行に関連すると思われる「子どもの声」が寄せられました。(特定非営利活動法人チャイルドライン支援センター発行「2020 チャイルドライン年次報告」参照)

下記に 2019 年度中にチャイルドライン OSAKA に寄せられた「子どもの声」をまとめています。(個人が特定できないようプライバシーに配慮して編集しています)

「今日、急に卒業式だった。先生は徹夜して準備してた。実感がわかない。政治家に対し不信感。ちゃんと選挙に行こうと思った。」

「入院中、病気は治ったがコロナで退院できない。」

「スーパーや病院でコロナにかからないか心配。」

「コロナウイルスでイベントとか中止、USJ とか行きたいのにつらい。」

「学校が休みで家にいる時間が長く母といるのが、気まずい。」

直接コロナという言葉が出なくても、今や将来に対しての不安な気持ち、周りのおとなの緊張感に影響を受けている気持ちも聴きました。子どもたちの体と心に大きな影響があると感じ、今、何を大切にしていけばいいのか、いつも以上に、子どもの権利について考えました。

『子どもの権利条約』の第 3 条に「子どもの最善の利益」がうたわれています。未知の感染症に対する不安を感じていたのはおとなだけではありません。突然の一斉休校を決定するときに子どもの声は聴かれたでしょうか？ また、急な対応であったとしても、その後子どもたちが納得できるような丁寧な説明責任を誰が果たしたでしょうか？ 友だちや先生との別れや、新しい生活への期待・楽しみを多くの子どもが奪われたままになっています。

子どもにとって良いことは子ども自身に確認しないとわかりません。「チャイルドライン」はどんな気持ちでも受けとめてもらえる場として、これからも語られなかった気持ちを十分に聴いていきたいと思っています。

## 小学生の電話環境について

2019年度のデータを見ていく中で、以前に比べ小学生からの電話が減っているのではないかという論議が起こり、会話が成立した電話件数の年齢別の割合の年度による変化を検証しました。

年齢 \ 年度	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
未就学	0.3%	0.3%	0.2%	0.0%	0.0%	0.4%	0.4%	0.0%	0.2%
<b>小学生</b>	<b>18.5%</b>	<b>21.2%</b>	<b>19.9%</b>	<b>30.6%</b>	<b>23.3%</b>	<b>22.0%</b>	<b>19.5%</b>	<b>17.1%</b>	<b>12.4%</b>
中学生	12.4%	15.5%	15.9%	17.6%	20.0%	21.1%	16.6%	18.0%	15.0%
中卒～18歳	27.8%	32.4%	35.2%	28.9%	42.4%	42.3%	50.2%	42.6%	42.4%
おとなかもしれない*							3.1%	6.0%	7.5%
不明	41.0%	30.6%	28.9%	22.5%	14.3%	6.3%	10.0%	16.3%	22.5%

(\*2017年度より「おとなかもしれない」の項目が増えています)

以前に比べ、固定電話をひく家庭が減り、公衆電話も減っています。携帯・スマホの所有率は学年が上がると増えていきますが、小学生では、携帯・スマホを家族と共有している場合もあり、子どもが自由に電話をかける環境とは言い切れない現状があります。

『子どもの権利条約』の第12条「意見表明権」は、「聴かれる権利」とも表現されます。おとなは、子どもがその年齢にあった表現で自分の気持ちを聴いてもらうことを保障しなければなりません。子どもの周辺にいるおとなが、その子どもの権利をしっかりと保障できていればいいのですが、年齢が低ければ低いほど、おとなの判断で最後まで話を聴かず口を挟んだり、意見を押しつけたりしがちではないでしょうか。

「チャイルドライン」では電話をかけるのも話を終えるタイミングも、子ども自身が決めることを大切にしています。「誰かに聴いてもらいたい」という気持ちで主体的に行動する子どもの力を信じているからです。

しかし最近、おとなが最初に電話をかけ、つながったら子どもに代わるような電話を何件か受けました。おとなの所有している電話を借りて話をする姿が浮かびました。

「ヒミツはまもる」…チャイルドラインと子どもの大切な約束のひとつです。広報用のカードにも最初に書かれています。子どもだけでなく周囲のおとなも「子どもの権利」を理解した上で、子どもがチャイルドラインで話をしているときにはそっと席を外してほしいと思います。

2019年度 チャイルドライン OSAKA 年次報告書



編集発行 公益社団法人 子ども情報研究センター

〒 552-0001

大阪市港区波除 4-1-37 HRCビル5階

TEL 06-4708-7087 FAX 06-4394-8501

HP <http://www.kojoken.jp/>